

序論)

「私は知っている」——この言葉には、ある種の力があります。

現代社会ではインターネットを通じて様々な情報を得ることができます。それこそ、地球の裏側で何が行われているのかを知ることができます。私たちは知識を持つことで、自信を得ます。正しい情報を知っていることで、安心します。そして時には、「私は知っている」という確信が、私たちに強さを与えてくれることもあります。

パウロの時代、地中海世界では「グノーシス」——つまり「知識」を重んじる思想が広がっていました。この考え方は、後にグノーシス主義という異端思想へと発展していきました。そして、このパウロの手紙が書かれた時代もすでに、「特別な知識を持つことが救いである」とか、「霊的なことを知っている者は、物質的なことに縛られない」という考え方が、人々の間に影響を与え始めていたのです。

コリント教会も、この「知識」を重視する風潮の影響を受けていたようです。教会の人々の中には、自分たちこそ真理を「知っている」と確信している人々がいました。彼らは正しい知識を持っていました。「偶像は実際には存在しない」「真の神様は唯一の神である」といった知識です。——これは紛れもない真理です。

商業都市コリントでは、市場で売られる肉のほとんどが偶像の神殿に献げられたものでした。職業組合の会議も神殿で開かれていました。そんな中で、「偶像なんて存在しないのだから、気にする必要はない」と知識を持って考える人々がいたのです。彼らの知識は確かに正しいものでした。

しかしパウロは、この「知っている」ことを誇る人々に対して、あえて警告を与えています。正しい知識を持っているはずの彼らに、あなたがたは「知るべきほどのことをまだ知らない」と語りかけるのです。

一体、パウロは何を伝えようとしているのでしょうか。「知っている」ということの本当の意味とは何なのでしょう。知識を持つことと、信仰に生きることは、どのように関係しているのでしょうか。

今日は、この御言葉を通して、真の知識とは何か、そして私たちは何を知るべきなのかを、共に教えられていきたいと思います。

1)知識は高ぶらせる、愛は人を育てる

まずは、最初のことばに目を向けます。

8:1 次に、偶像に献げた肉についてですが、

パウロが受け取ったコリント教会からの質問状には、偶像に献げられた肉をどのように理解して、自分たちはどのように振る舞ったら良いのかという質問があったようです。

それは恐らく、コリントという町の特徴に由来していました。

コリントの町は商業都市であったのと同時に、様々な偶像の宗教的要素と人々の暮らしが密接に関わっている町でもありました。例えば、コリントの町で売られている肉は、そのほとんどが一度偶像の神殿に貢物として献げられた肉でした。コリントの人たちは、偶像の神殿からのお裾分けとも言える肉を購入して食べていたのです。また、コリント人たちの、鍛冶組合、商業組合、農業組合といったそれぞれの職業組合の会議も、偶像の神殿でなされていました。偶像の神殿の広場は、コリント人たちにとっては宗教的祝宴の場であり、交流の場でもあったのです。

ですから、キリスト者にとっても、偶像の神殿に行って組合の会議に参加したり、神殿の広場で振る舞われる食事を食べないことは、地域社会との交流の断絶を意味していました。こういった背景があったため、コリント教会の人たちは、偶像に献げられた肉をどのように扱って、偶像の神殿、及び付属する食堂や広場に行くことをどのように理解したらいいかを迷っていたのです。

8:1b「私たちはみな知識を持っている」ということは分かっています。

しかし、そういった迷いの中にあるコリント教会の人々の中にも、迷わず肉を食べて、神殿の広場や食堂で食事をしている人たちがいたようです。その人たちは、4節でパウロが引用しているように、この世の偶像は実際には存在しないものであって、気にする必要のないものだということを知っていました。だからこそ、彼らは一度偶像に献げられた肉であったとしても、気にすることなく食べて、偶像の神殿の広場や食堂であったとしても気にせず利用していたのです。

そして、恐らくその人たちは、パウロに送った質問状の中に、「まことの神様は、自分たちが信じている唯一の神様以外はいないのだから、偶像に献げられる肉など気にしなくても良いのではないか」というような内容を書いていたと思われます。

みなさん、これは正しいことでしょうか？ 正しいです。私達はいもしない神を気にする必要はありません。

しかし、パウロはそういった人々に一つの警告を与えています。1 節の後半と 2 節を読みましょう。

8:1c しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます。

8:2 自分は何かを知っていると思う人がいたら、その人は、知るべきほどのことをまだ知らないのです。

4節を見れば分かりますが、パウロは偶像の肉を気にしない人たちの知識を一定の範囲で認めています。

でも、正しい知識を持っていたからといって、迷っている兄弟姉妹を放置して、その知識を自分たちの振る舞いを正当化するだけに用いるのであれば、その知識の使い方は本当の知識を持っている人のやり方ではないことを指摘しています。(2節)。

パウロは「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」と語っています。

これは、「知識を自分のためだけに用いるのであれば、それは自分を増長させるだけのことであって、本当に大切なのは知識をひけらかして自分を正当化させるのではなく、愛によって人を育てていくことだ」という意味です。ここで「人を育てる」と訳されているギリシャ語は、元々は建築することを意味する「建てる」ということばです。パウロは、教会が一つとなって成長していくことを指して、この「建てる」という言葉をよく用いています。

キリスト者にとって必要なことは、知識をひけらかして、自分を大きく膨らませてみせることではなくて、愛によって迷っている兄弟姉妹を支えて、教会を建て上げていくことです。

ですから、知識より愛の実践という優先順位を知らずに、自分の知識を自慢しているような人は、「知るべきほどのことをまだ知らない」人なのです。どんなに聖書知識を持っていたとしても、愛によって人を育てることを知らない人は、まだまだ無知なのです。

そして、キリスト者にとって愛を実践することよりも、さらに大切なことをパウロは3節で述べています。

8:3 しかし、だれかが神を愛するなら、その人は神に知られています。

これは、「神を愛する人は、神に知られるようになる」という、神に知られるための因果関係を説明していることばではありません。

寧ろ、「神を愛するということができている人は、必ず神に知られている人である」という、愛という実践の背後には必ず神様に知られているという事実があることを示しています。

分かりやすく言うと、私たちは神様に知っていただいているからこそ、私たちはその神様を愛することができるということです。

そして、神様に知っていただいているということは、神様に愛されているということです。私達は神様に愛されて、その愛によって私達も神様を愛し、人を愛せるようになるのです。

この一連の流れを整理すると以下ようになります。

神様に知られる(愛される)→神様を愛せるようになる→愛によって人を育てる→真に必要な知識を得る

知識がすべての始まりではありません。寧ろ、すべての始まりは神様に愛されることであって、その結果として、神を愛して、人を愛して、正しい知識を得ていくのです。

私たちはこの原則を正しく用いなければ、せっかく得た知識も自分を肥やすだけになってしまし、真に知るべき知識に至らないのです。

みなさんは真の知識を得るに至っているのでしょうか？ 至っていないとしたらこの4つの段階のどこで止まってしまっているのでしょうか。私達が神様に知られ、神様に愛されていることは間違いありません。では、その愛を受けて、私達はどのように生きているのかを振り返ってみましょう。

2)唯一の神とキリストと私たち

4 節からパウロはもう一度、偶像に献げた肉に視点を戻して、唯一の神とキリストと私たちの関係について述べています。

8:4 さて、偶像に献げた肉を食べることについてですが、世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」ことを私たちは知っています。

パウロは、自分たちは正しい知識を持っていると思っていた人たちの意見を一定の範囲で肯定しています。それは、神として崇められている偶像の神は、実際には存在しないものであって、神として存在しているのは私たちが信じている唯一の神だけであるということです。

これは紛れもない真実であって、私たちも否定できません。

ただし、パウロは 10 章の 20 節で、その偶像の背後には悪霊の働きがあることを

警告しています。10 章 20 節を読みましょう。

10:20 むしろ、彼らが献げる物は、神にではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。

コリントの町で信仰されていたアポロ、アフロディーテ、ポセイドン、アスクレピオス、ヘルメスといった神々は、実際には存在していません。しかし、そういった偶像信仰の背後には悪霊の働きがあるのです。

ここで問題とされているのは、そういった偶像の神々がコリントにおいて神として、そして、主として信仰されていたとしても、キリスト者に知らされている真理は別であるということです。6 節を読みます。

8:6 私たちには、父なる唯一の神がおられるだけで、この神からすべてのものは発し、この神に私たちは至るからです。また、唯一の主なるイエス・キリストがおられるだけで、この主によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在するからです。

神と呼ぶべきお方は、父なる唯一の神だけです。

そして、この神と私たちの関係は、

神様は、すべてのものの起源であって、私たちの目的となるお方であるということです。私達は、神様の御心が成就するために生きるのです。

そして、私たちが神様の御心を成就するためには、唯一の主であるキリストによって生かされなければいけません。ですから、パウロは「この主 {キリスト} によってすべてのものは存在し、この主によって私たちも存在する」と宣言しているのです。

神様こそが、私たちの根源であって、目的です。そして、その神様という目的に向かって私たちが歩むためには、キリストによって生かされなければいけないのです。

神様が唯一の神であるということは、私たちと神様との間にはこのような関係が成り立っているということを理解しなければいけません。

特に注意しなければならないのは、聖書は私たちの存在を根底から支える父なる神と主なるキリストを同格の存在として語っていて、エホバの証人などの異端が語るように「キリスト」と神を別扱いしていないということです。

父なる神も、主なるキリストも、私たちの存在を生み出して、支えて、導く唯一の神なるお方です。

私たちは自分のルーツと存在と目的をどこにおいているでしょうか。

先祖や民族を自分のルーツに据えていないでしょうか。いいえ、みなさんは神様によって生まれた存在です。

私達は自分の存在意義を、この世の仕事や、お金や、人間関係においていないでしょうか。みなさんの存在はキリストによって支えられています。

そして、私たちは自分の人生の目標を、自己実現や、この世の楽しみ、この世の成功に据えていないでしょうか。みなさんの目的は神様の御心を成就することです。

もし神様以外に自分のルーツを据えて、キリスト以外に自分の存在意義を置いて、神様以外のものを自分の人生の目的に据えるのであれば、その神様が座るべき心の王座に居座っているものこそが、あなたにとっての偶像です。

私たちはそういった偶像を捨てて、唯一の神にその座を明け渡さなければいけません。

結論)

パウロは、偶像に献げられた肉という具体的な問題を通して、私たちの信仰の本質を教えています。

第一に、**知識よりも愛が優先される**ということです。正しい知識を持っていたとしても、それを自分の正当化のために用いるだけでは、人を高ぶらせるだけです。真の知識とは、愛によって兄弟姉妹を支え、教会を建て上げることへと導くものです。

第二に、**すべての始まりは神様に愛されていることにある**ということです。神様に知られ、愛されているからこそ、私たちは神を愛し、人を愛することができます。知識は、この愛の実践の結果として正しく得られるものなのです。

第三に、**父なる神と主イエス・キリストこそが、私たちの存在のすべてである**ということです。神様は私たちのルーツであり、目的であり、キリストによって私た

ちは生かされています。

私たちは今、何を自分の人生の土台としているでしょうか。先祖や民族、仕事や成功、お金や人間関係——これらに神様の座を明け渡していないでしょうか。もしそうであるなら、それこそが私たちにとっての偶像です。

真の自由は、唯一の神にすべてを明け渡し、キリストによって生かされることの中にあります。私達は神様に知られ、神様に愛されています。この愛に根づき、知識を誇るのではなく、愛によって互いに仕え合い、教会を建て上げていく者とされましょう。私たちのルーツも、存在も、目的も、すべてを神様に置く信仰に生きる者として歩みたいと思います。